

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

体験型と専門教育を連携し 学習効果を更に高める

2010年度に当コーナーで紹介した大学の多くは、学生の意欲を高め、能動的な姿勢を育てることに
主眼を置いていた。今号では、PBL（課題解決型授業）と専門科目を連携させたカリキュラムをつくり、
実践と専門性を結び付けて学習効果を上げている取り組みに注目する。

企業では個の能力と同様に 組織に貢献する能力も重視

大学卒業後、大半の学生は社会
に出て働くが、大学教育では企業
から求められる力の育成にどれだ
け応えられているだろうか。

初めに企業が新卒者に求める能
力を見ていこう。経済同友会の調
査によると、「新卒採用者選考の際、
特に重視している能力」の上位三
つは「熱意・意欲」「行動力・実行力」
「協調性」である（図1）。

日本経済団体連合会（経団連）

の調査でも、「大学生の採用にあ
たって重視する素質・態度、知識・
能力」には「主体性」「コミュニケーション
能力」「実行力」などの項目
が上位を占める（図2）。同調査に
おける「文科系、技術系・理系大
学生に期待するもの」では、「論理
的思考力や課題解決能力を身に付
ける」「チームを組んで特定の課題
に取り組む経験」などに回答が集
まった。更に、「大学が取り組みを
強化すべきもの」を見ると、「教育
方法の改善（双方向型、学生参加
型、体験活動を含む多様な授業の
実施）」が最も多かった。

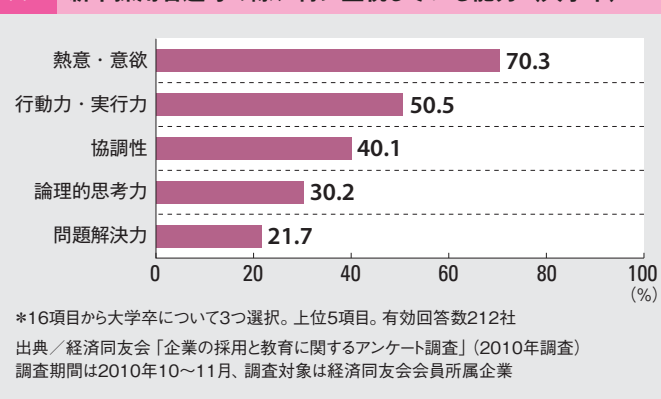
以上の調査結果をまとめると、
社会で活躍するためには、主体性
や実行力といった「個」の資質や
能力だけではなく、「チーム」の一
員として貢献するための協調性や
コミュニケーション能力、バラ
ス感覚などが必要といえる。そし
て、大学にはそれらの資質を備え
た人材を育成するための教育改善
が求められていることも読み取れ
る。

こうした社会的要請に応える学
習活動の一つとして、2010年
9月号の当コーナーではPBL
(Project Based Learning 課題解決

型授業)を取り入れた二つの大学
を紹介した。チームで課題の発見
と解決に取り組む、専門教育の内
容を身に付けるだけでなく、主体
性やコミュニケーション能力など
の涵養を目的とする授業形態だ。

体験型授業は、ともすれば「体
験できて楽しかった」という感想
だけで終わってしまい、意図する
力が身に付いていないケースもあ
る。学生の意欲だけでなく専門性
も高めるために、体験内容と学部
教育の専門性をどのように結び付
けて行っているのか。更に二つの
事例を紹介する。

図1 新卒採用者選考の際、特に重視している能力（大学卒）



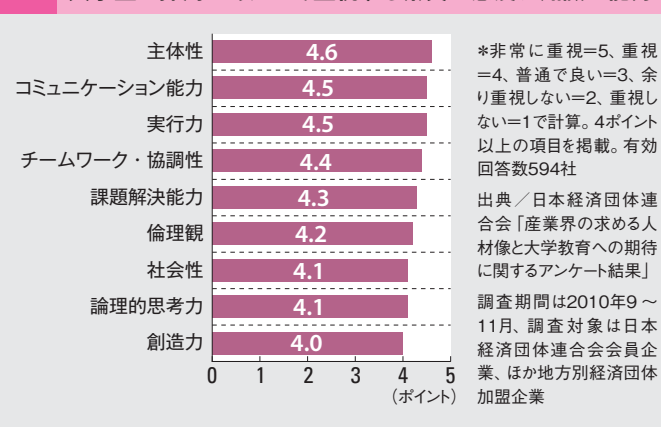
グループワークを通して「組織の意思決定」を体験

産業能率大経営学部
フューチャー・ラーニング

◎課題意識と狙い

大学では、多くの場合PBLを集団で行い、社会に求められる力を育成しようとしている。企業では、組織で意思決定したことを、皆で協力して成し遂げていくからだ。企業と同様の「組織の意思決定プロセス」

図2 大学生の採用にあたって重視する素質・態度、知識・能力



「企業では組織での意思決定が重視され、個人で物事を判断する場面は多くありません。1年次からグループで問題解決を行う経験を繰り返させ、組織の一員としての思考や態度を育成しようと考えています」

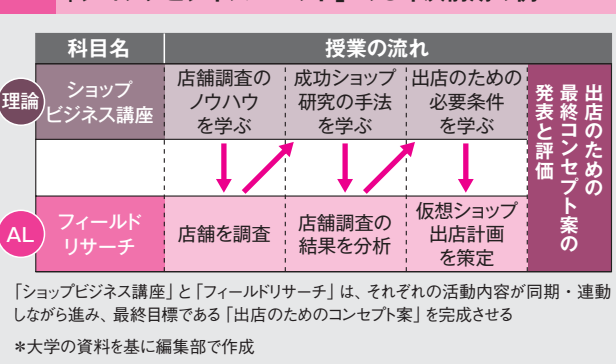
◎取り組み内容

同大では、社会で通用する知識・

技能、問題解決力を備えた即戦力の育成を目指し、4年間を通じてアクティブラーニング（AL、能動的学習・参加型学習）を行う。しかし、AL（実践）に偏り過ぎると、座学（理論）がおろそかになる。そこで、4年間を通して理論と実践を行き来するカリキュラムを作成した。

3、4年次に履修する「ユニット専門科目」を例に挙げて説明する。これは五つの体験型科目から一つを選ぶプログラムで、このうちの「ショップビジネスユニット」では「ショップビジネスユニット」では「ショップビジネス講座」と、AL主体の「フィールドリサーチ」の2科目を学ぶ（図3）。店舗調査のノウハウを学んだ後（理論）、グループで店舗を調査し（AL）、次に店舗分析の手法を学び（理論）、調査済みの店舗を分析する（AL）という流れで、理論と実践が関連しながら進む。後期も同じ学習形態とし、最終的にグループで経営計画書をまとめ、授業中にプレゼンテーションをする。「ショップビジネスユニット」を履修した3年の落合真純さんは次のように話す。「男性が1人で入りやすいカ

図3 理論とAL（実践）が補完し合うカリキュラム「ショップビジネスユニット」の3年次前期の例



フェ」をコンセプトに、実在する店舗を研究しながら、立地やレイアウト、損益計算やコスト管理などを記載した詳細な経営計画書を作りました。計画書の数値を精緻なものにするのは大変でしたが、授業を通して「経営」をより実感できました」

同大ではこうしたカリキュラムにキャリア教育も組み込んでいる。2年次の「キャリア設計と自己開発」では、自分の性格や将来像をグループで話し合い、発表する。専門教育やALを通して出てきた関心や、本

人の強みなどを進路指導にも生かす。3年次以降のゼミは「進路支援ゼミ」と位置付ける。ゼミ担当の教員だけでなく、キャリア支援センターの職員が一人ずつゼミを受け持ち、学生の自己分析などを支援している。

◎成果と課題

同学部が重視するA.Lは、教員はファシリテーターで、学生自身で答えを出す学習だ。「情報が不十分でも自分たちで考え、解決策を出そうとする学生が増えました。これはビジネスにおいても重要な姿勢です」と松尾教授は評価する。A.Lは、学生自身が座学と上手に結び付けられれば、高い学習効果が期待できる。ただ、実践的であるが故に、A.Lだけで満足し、知識の定着や学習が深まらない場合もあるのが課題だ。

課題を発見し、ユーザーのニーズを満たす企画を立案

専修大ネットワーク情報学部
プロジェクト

◎課題意識と狙い

学部が扱う専門分野で必要となる実践力を付けるためにPBLを取り

入れる大学もある。専修大ネットワーク情報学部は、3年次の「プロジェクト」を4年間のカリキュラムの軸に据える。数人から十数人が1チームとなり、1、2年次で学んだ情報技術や知識を活用して一つのテーマを追究する必修科目だ。09年度のテーマには、「一人暮らしの大学生の孤食と食品廃棄を減らす支援システムの開発」「すべてのお金が電子化された社会での買い物シミュレーション」などがあった。小林隆教授は、「プロジェクト」の狙いを次のように話す。

「進化が著しい情報分野では、大学で学んだ知識は10年と持ちませぬ。だからこそ、自ら課題を発見して解決し、新たな価値を生み出せる人材を育てる必要があります。この科目は、チームで課題発見から解決までに取り組み、問題解決力はもちろん、協調性、コミュニケーション能力などを育成していきます」

◎取り組み内容

「プロジェクト」は、2年次後期に学部内のコンピューターネットワークで研究テーマに賛同する学生集めから始まる。同時に、学生は担

当となる教員を探す。研究テーマを説明し解決の意義があると認められなければ担当教員が付かず、そのテーマはボツとなる。こうした過程を経て約20テーマに絞り込まれた後、3年次前期から研究が始まる。

学生が最初に産みの苦しみを感じるのは、企画書作りだ。小林教授は、「作る物が決まっていれば、知識と技術を駆使して解決できます。ところが、企業ではそれ以前に問題を発見し、いかにユーザーのニーズを満たすかを考えることが重要です。自分たちで目標を設定する過程を体験してこそ、『ユーザー』から『作り手』へと意識が変わり、問題解決力が育つのです」と説明する。

一つの目標の下に集まった仲間とはいえ熱意には差があり、チームを一つにまとめて1年間、計画的に作業を進めるのは容易ではない。3年の本間小百合さんはこう振り返る。

「チームを三つのグループに分け、私はその一つのサブリーダーをしていました。最初はメンバーにどう働き掛ければよいのか分からず、作業がなかなか進まずに悩みました。まずは自分の考えを伝えな

図4 「プロジェクト」を体験した学生の感想

1年間の「プロジェクト」から多くのことを学んだ。苦痛に感じることも多かったが、実社会、企業で行うものに比べたらかなり重みは軽減されていると思う。

会社でいえば、「同僚」に当たる役割のプロジェクトメンバー、「上司」に当たる役割の先生、それぞれの立場の人がどう動いてどうコミュニケーションを取れば円滑に物事を進められるかが、今回学んだ中で一番重要なことだと感じた。いくつかの賞をもらい、達成感も味わえ、感慨深いものがある。最後に、1年間に汗を流したメンバー、先生に感謝したい。

*大学の資料を基に編集・作成

れば道が開けないことに気付いてから、状況が改善していきました」

小林教授は、「日頃とは異なる人間関係の中で苦勞することにより、コミュニケーション能力や粘り強さが身に付く上に、『仕事はこういうものなのか』と実感できます」と話す。学生の感想からは、苦勞を通じた成長の様子がうかがえる(図4)。12月に学内外を対象とした発表会で成果を報告すると共に、全チーム分をまとめた冊子を発行する。

◎成果と課題

ネットワーク情報学部は、他学部に比べて就職率が高く、「プロジェクト」を中心に据えた同学部の教育の成果が現れている。本間さんは、「最初は漠然とICTに興味があり

将来の展望が具体的に
カフエ経営の夢に近付いた



産業能率大経営学部
現代ビジネス学科2年
川森 こと
(東京都立晴海総合高校卒業)

高校時代からカフエを開くのが夢で、高校卒業後の進路には調理の専門学校への進学も選択肢にありました。考え抜いた末、まずは「経営について学ぼう」と思い、この学部を選びました。

しかし、入学してすぐに感じたのは、「自分の考えは甘かった」ということ。勉強を進めるにつれ、カフエ経営には入念なビジネスプランが不可欠と思い知りました。特に、2年次に5人グループで、親子が集まれる「子育てカフエ」のプランを作成した際には、損益計算などのシミュレーションに苦勞し、カフエ経営を具体的に考えられるようになりしました。3年次では「シヨップビジネスユニット」に進み、より緻密なプランを練りたいと思います。

以前は大学卒業後すぐに開店したいと考えていましたが、今は、例えば食品会社などに就職して知識を深め、人脈を作れば、カフエ経営に大きなプラスになることに気付くなど、自分の将来をより幅広く、より具体的に考えられるようになりしました。焦らず一歩ずつ進み、夢を実現させたいと思います。

プロジェクトを通して知った
チームをまとめる難しさ



専修大ネットワーク情報学部
ネットワーク情報学科3年
杉井里沙
(神奈川県立光陵高校卒業)

本校は第1志望ではなかったため、1年次は最低限しか履修せず、学習にはあまり意欲的ではありませんでした。その姿勢が変わったきっかけは、2年次で履修したビジネスプランを考

える授業です。この授業で作ったプランを基に、3年次のプロジェクトでは「大学生は教科書を十分に活用していない」という問題意識から、教科書を電子化して、安価で扱いやすく、中身も分かりやすくすることをテーマにしました。学内外で行われるビジネスコンテスト入賞を目標にし、開発に没頭しました。最も大変だったのは、自分がリーダーとなり、11人のメンバーをまとめること。前期は何でも自分1人でやろうとしてチームの雰囲気が悪くなり、つらい思いをしました。後期は考えを改め、メンバー一人ひとりに作業を任せました。その結果、皆に責任感が芽生え、研究がスムーズになりました。期日内に完成させて皆で喜び合った時の達成感忘れられません。学内外のビジネスコンテストで賞を獲得できたことも自信になりました。

入学しましたが、人とかかわりながら自分も成長できる楽しさを知り、人を動かすような仕事に就きたいと思うようになりました」と話す。

苦勞と表裏の関係にある、やり遂げた時の達成感は、将来への意欲にもつながっているようだ。

進路指導に生かす

専門学習との関係をつかみ
プログラムの充実度を確認

今号で紹介した2大学共、個々の学生の能力・態度を育てるだけでなく、組織内での意思決定の体験や役割意識の向上を目指している。冒頭で述べたような社会的ニーズに合致する人材の育成を意識していることがうかがえる。

実践的な課題を扱うPBLは、従来型の一斉授業に比べて指導に手がかかる。そのため、学生数と教員数のバランス、個々の学生への支援体制、また学習の成果物や就職状況といった実績などから、プログラムの充実度を確認すべきだろう。

PBLが必修科目の場合、参加する学生の意欲にばらつきが生じることは避けられない。単なる「体験」

で終わってしまい、「楽しかった」といった感想しか残らない学生が少なくないのは、PBLを導入する大学の共通の課題だ。いかに専門科目と連携させて相乗効果を生み出すかは、各大学のPBLの特徴が最も表れやすいポイントである。ディプロマポリシーとカリキュラムとの整合性に加え、カリキュラムの中で他の科目や前後の学年の学びと、どのように連動しているかを十分にチェックしたい。同様に、PBLの学びが学生のキャリア形成にどのようにつながるかを確認することも、プログラムの充実度が見えるだろう。

大学関係者が高校に訪問した際、また生徒がオープンキャンパスに出向いた時などには、プログラムの良い面だけでなく、運動性や成長が期待できる面など、全体像を理解するための質問をすることが、納得のいく大学選択につながるはずだ。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail: view21_since-1975@mail.benesse.co.jp